
怪話篇 第十一話 殺人事件

K1.M-Waki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪話篇 第十一話 殺人事件

【Nコード】

N8041T

【作者名】

K1・M・Waki

【あらすじ】

何のへんてつもない朝の学校風景だったが、そこには存在するはずのない生徒が混じっていた。唯一それを知っている一人の教師が最後に見たものは…

怪話篇 第十一話 殺人事件

1

「先生、おはようございます!」
「おはよう。」
「おはようございます。」
「ああ、おはよう。」
「おはようございます、先生。」
「ああ、おは……。」
「先生、おはようございまーす。先生?」
「先生、どうかしたんですか?」
「あつ、いや。何でもない。」
「顔色悪いですよ。大丈夫ですか?」
「先生、…….どうかしましたか?僕の顔に、何か着いてるんでしょうか?」
「いつ、いや。何でもない。ほら、早く教室に入らないと、始業のチャイムが鳴ってしまつぞ。」
「はあーい。行こ行こ。」
「おはようございます。」
「ああ、おはよう。こら、今村も…….早く行きなさい。」
「おはようございます、先生。」
「おはよう。」

2

「僕に話つて、何ですか?」
「今村。…….いや、おまえは今村じゃない。…….誰だ。一体誰なんだ。」

「誰って、……何変な事言ってるんですか？先生、変ですよ。」
「変だつて。馬鹿を言え、変なのはおまえの方だ。絶対に、おまえは今村じゃないんだから。」

「な、何でなんです。本人目の前にして、訳の判らない事言つて、……先生は僕に怨みでもあるんですか？」

「お、おまえが、俺にそんな事を言える訳がないんだ。えっ、何が望なんだ。金か、それとも……」

「もう、僕には訳が判りません。それに、もうこんな時間だし。先生、僕帰りますからね。」

「待て！待つんだ。」

「何で待たなけりゃあ、いけないんですか。そこどいて下さいよ。……先生？……先生、何を……」

「おっ、おまえがつ、今村でっ、あ、ある筈はっ、ないんだよつ。今村はっ、あの時つ、死んつ、だんつ、だつ。間違えるもんかつ。くっ、首がつ、半分つ、ちぎれてっ、いたんだからっ、なつ。」

「せっ、……せん……せ……」
「もうっ、にっ二度とっ、生き返つてっ、来るっ、なつ。」

「……」
「おまえはっ、死んだんだつ。もう、返つてっ、来るなつ。」

3

「先生、おはようございます！」

「おはよう。」

「おはようございます。」

「ああ、おはよう。」

「おはようございます、先生。」

「ああ、おは……」

「先生、おはようございませーす。先生？」

「先生、どうかしたんですか？」

「あっ、いや。何でもない。」

「顔色悪いですよ。大丈夫ですか？」
「先生、元気なあーい。あれのやり過ぎですか。」
「あつ、．．．いや。大丈夫だよ。はは、ちよっとタベ、飲み過ぎちゃってねえ。」
「なあんだ。まだ若いと思って、ガブ飲みしたんでしょ。」
「もう、おじさんなんだからね、先生。」
「はは、もう授業が始まるぞ。早く教室に入つて。」

4

「何ですかあ、先生。こんな処に呼び出したりして。」
「おまえ、本当は誰なんだ。ええっ、答えるんだ。」
「何を言ってるんです。話つて、そんな事なんですか？」
「答える。おまえ、どうして生きているんだ。」
「どうしてつて、．．．もう、何変な事。」
「おまえは、今村じゃあない。今村は、俺がこの手で殺したんだからな。それも二度も。絶対に生きてる筈はない！」
「先生、．．．僕を殺したつて。だつて、僕は、ここに生きてるんですよ。」
「うっ、嘘だつ！俺が殺したんだぞ。最初は、自動車で。つつ、次は、この俺の手で、．．．締め殺したんだからな。なのに、．．．なのに、どうして生きてるんだあ！」
「せ、先生、．．．」
「どうしてなんだー、わあー．．．」
「わわっ、先生。先生、止めて下さい！止めて．．．」
「死ぬ！死ぬんだ。もう絶対に、生き返るんじゃない。」
「や、．．．やめ．．．」
「グアツ．．．」
「ああ、．．．先生。先生．．．」
「うっつ、死つ、死ぬー。」

「あれっ？先生、どうしたんです？こんな処で。」

「き、君は？」

「4組の松戸ですが。」

「松戸？松戸京一か？た、頼む、……救急車を……」

「先生、怪我してるんですか？痛そうですねえ。」

「そ、そんな……言ってる……。は、早く……。救急車。」

「……」

「な……。に……。て……。だ？早く……。呼んで。」

「ああ！先生、ひどいなあ。これ、今村君じゃあないですか。」

「ちっ、違っつ……。俺じゃ。こいつが……。勝手に……」

「。」

「あーあ。こりやあもう駄目だなあ。ああっ！ひよっとして、夕べこいつを潰したのも、先生ですかあ？」

「ちっ、違っつ……。それよりも、早く、救急車。ああ……」

「こんなに血が……」

「しょうがないなあ。これじゃあ、もう直しようがないじゃないですか。どうしてくれるんです、先生。」

「どっ、どうしてっつて。君は……。何を言っつて……。ウウ。」

「もう！折角の力作が。これ、夏休みの宿題で提出するつもりだったんですからね！どうしてくれるんです。」

「！……。な、何をする気だ？」

「ふふ。先生に責任を取ってもらおう事にしましょう。今村君の再生用の細胞は、もう無くなっちゃいましたからね。先生、どのみち、救急車を呼んでも間に合いませんよ。まあ、この際だから、先生にサンプルになってもらいます。」

「……」

「安心して下さい。クククッ、前より若々しくしてあげましょうね。でも……。生きたままやっちゃうと、人体実験になっちゃういま

すから・・・。ちょっと待ってて下さいね。今すぐ楽にして・・・
・あれ、もう逝っちゃったか。せっかちだなあ。」

e o f .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8041t/>

怪話篇 第十一話 殺人事件

2011年10月9日03時54分発行